

秋成佚文

藤井乙男

大正七年「秋成遺文」の編成りてより約十年、昭和四年再版に際しその後發見した文章十數篇を補遺として卷末に附加した。それから今日までさしてこれとは思ふやうな新獲はないのであるが、先年猪熊信男氏から借覽した一卷はかなりの長文でもあり、又寓意ありげな作意のをかしきものなれば、茲に掲げて洩く世に示さうと思ふ。

いまはむかし芦がちる難波入江のきし根に年經てすめるいなつき×の翁と云者有けり、かたちあやしきのみならず、ころもいとあやしうひがみたりけり、何がしのはかせの翁が事をやそしりたりけむ。世の人かたりごとにしたりける。小醫生ニ江浦、營ニ穴蘆岸下、穴中不盈寸、自以爲ニ大厦、朝慮ニ沙岸崩、夕怕ニ江潮瀉、物小識又微、營々何爲者。おきなもおのがうへに聞ふけりてむべ言とや思ひけむ、打ひそみひとりごちける。

二 蟹且八腕、誰識内遠柔、郭索是吾性、逡巡守ニ獨幽。

またある時は

つこの國のなにはにつけてうとまるゝあしはらがにのよこばしる身は。

子をなむひとりもたりける、心はたみじかくて親の僻めるをさへ稟つぎ、よろづの事くねくしかりければ、翁が心にたがへるふしのおほかめれどいかゞはせん、たゞ打うめきて過しけり。五月雨の餘波高なみをよせきていともうかりければ、しばし外に移りすむとていきけり。このいほりには此子ひとりとゞまりをり、おきながかたじけなきものに藏めおきつる寶の貝一つあるをあづかりてけるが、ゆふ波にやとられけん、失ひにけり。物狂ほしきさがなものなりければ、いかにさいなむ覺、しをりや殺すといたうものおちして病ふしにけり。翁が友がき鬚長の眞海老、河尻のすゞき雄、玉江の女鮎、早瀬の宇治丸等あつまり來て、いかにぞや我ともよきにこしらへてん、物だにくはではといへど、たゞ伏にふしてほとく死んとおもひたりけり。人々諫めかねつゝ、こゝかしこにもとめありきけれど、ふつにあらざりけり。みをつくしの邊にておなじ色なる、かたちも今一きはまさりたらむとおぼしき玉の光を見出たかづきもて來て、是見たまへ、いみじき寶もこそあなれ、かゝるが有つるものを、やまひなせそといさめつれば、やゝ生出たるが猶いかにかうぜられんの心のなごりに病伏にけり。此事おきなきかすなとはかりあはせたれど、誰か耳おどろかしけむ、あないみじ、ふたつなきたからを失ひつるに、此子をさへうしなひてんがいと悲しき事とて、まづ心をとるべくとて、れいの芦手して横ばしらせ、鬚ながの叔父がもとに云やりける。

あなう、あないみじ、物うしなひつると聞者まことか、かくゆくりなき事の出くるなん、翁が身幸ひなきものにして侍るかな、されば厩焼たりと聞て、人をばあやまたざりしやと問せ給へるにならひて、たゞく命こそふたつたな

きたからなれ、此子死なば翁も泣死せん、うたてくも有か、よくさぐりもとめてよ、えずとていかにせむ。神代の物がたりに、はらからのみこと達、海山にわかれて獲ものしありき給しに、兄の命の釣ばりをしばしたまはりて海に遊びたまへりしが、この針を失ひたまひき。あにみこいたくのしりて、今たまへと責聞えたまへば、打なきてこゝかしこもとめわびつゝ、わたつみの都にいたらせて、赤女の口よりもとめ出たるのみかは、よき御女をさへめとりかへらせて、兄み子のあしきさがをもことむけしたまひつと云。一たびのあやまちによりて、いみじきさいはひもとの出たまへりき。この針はまことさちちなりけり。世の事どもを見きくに、一かたによしともあしとも成はつるにはあらで、よき事にもあしきがくははり、あしきにもよき扶けの出くるものぞ。我遠津祖達は丹波の國水上の郡上田の里と云所に棲ふりたまひし、そこは山陰なりければ、片岡なるところに栗柿の林立榮えたりけり。此おく山の猿丸が何を仇とか、我おほ父なる人をひら柿の礫に打ころしてける。其子なる人泣うらみつゝ、あはれ報ひせんとぞはかりける。其真ごゝろにめでゝ誰かれのつはもの等あつまり来て、助けて仇をうたせてけり。いみじのしわざやとて、この事をなん世がたりにはいひはやせる。親をうたせればこそ又このほまれある名は得たまへりき。されば猿丸がぞうの廣さには、又のむくひやせられむの遠きおもひはかりして、はるく此なに波江の葦根にはひかくれたれば、仇こゝまでは追こざりしより、翁にいたるまで七世をなん經にける。かしこの山田のきしをこゝにすみかへて、世にひろらに過い侍る事、とほつみおやのみたまのふゆとかまうす有がたさを思ふたまへらるゝなりけり。又物失なひつるにつきておぼし出ぬ。昔百濟の川成と云人ありにけり。大宮つかへのいとまには繪をめてたかくかきて遊びたりけり。いとかなしくめしまつはせしわらはの、俄に失ていきかた知らずなりにければ、人を走ら

せてをちこちもとめけれど、まよはし神のあしくさをひいきけん、えもとめあはざりけり。川成この童がかたちを寫しなして、あまねく世に散せしかば、はたしらぬ人の繪にあはせてゐて來たりしとなん。是より上手の名高く物にもしるしつたへたりけり。昔の繪はさばかりの事かたくやしけむ、人さしあふぎたりけり。今の上手は人のかたち草木鳥むしをまで、まことの物にとりなべてだに、いづれ見わかつまじくうつしなすとや。さは昔のいまにおとりたりけん、繪のぬけ出てさまよひありき、木に作りし人の物などいへる、かたり艸にするはおよづれ言にやある、よろづの事どもいにしへにおとるといふを繪や今のまさりたる、知らぬ事かう云つゞくるは、物失なひつれば、あはれかたばかりだに寫しもとどめまくおもふこゝちまどひしていふ也けり。誠にや、もと有しにまさりて光ある寶の珠もとめたりとは、さは親のために物失なへりとやいはん。いまはおもひのどめてやまひなせそと、叔父よくしへ聞せ給へ。さるにてもいふかひなき翁が物求めや、今よりふつにおもひたゆべくなむ。あなかしこし。

よの事はみなから無しのをしへをばしらでもとめし實なきこゝろに。

かく聞えこしければ、この子今なん生出イキイデにける。翁もやがてかへり來て、恙なかりしをよろこび、ひと夜あるじしけり。人々酔のすゝみに歌よみしけり。

なゝくさにかぞへもらぜししら玉のこやふたつなきたからなるらし。

眞 海 老

鱧 男

墨の江のながるの蜚がきし陰におき忘れ貝誰かひろひし。

禹 遲 丸

ぬきとめし玉はみだれつゆ露の光をとめて又もぬかなむ。

女 ぶ な

難波津に舟こぎ入て跡見れば心つくしは雲井なりけり。

翁も酔しれて立あがりはうしどり、足みだりにふみはらゝかしつゝうた舞をなんしける。

蘆はら田のいなつき蟹の、おのれだによめをえずとてや、さゝぎてはさゝげや、さゝぎてはさゝげや、かひなげをするや。

まろうどみな打わらひて、かく老オイにたまへど猶嫁とりせまくとや、いと花々しくこそおはせといへば、翁つら打あかめ、あしくまうしつるには、いみじき恥見たるぞとて、かしこまりをり。

難波江のあし手なるはもとよりにて、まなこしひまどへるにぞ筆立よろほひ、ところぐ書あやまりつ、さは讀ヨミえがたきをばたゞに見過したまへ。

無 勝 (二字印文)

右は眞假相交れる戯文で、その本意を十分に解しかねる處もあるが、少しく註釋めきた蛇足を加へて見よう。

いなつきの翁はいふまでもなく秋成自らの事で、此文の終り方に出てゐる神樂歌篠波の「蘆原田の稻春蟹」から取り來つた假稱である。郭索は蟹の歩む貌で大玄經を典故とする。秋成が七十五歳の時書いた漢文の自贊めきたものにも穴居岸下、別有二天地、此天地内、春秋不順、花卉鳥蟲無時、近曾發懷云、人云美、我見之醜、美醜不分、則又無

有<sub>レ</sub>善惡邪正、甲堅蟹振、遂爪折、一身爲<sub>レ</sub>廢物、於是愈遂巡守<sub>三</sub>獨幽<sub>一</sub>とある。

秋成には實子なく養女が一人あつた。享保元年十二月秋成(時に六十八歳)が北野加茂兩社に詣でて途に迷ひ、疲れて、夕暮方やうやく家に歸りついたのを娘の尼が介抱したとあり(遺文三七二頁)よもつ文(藤笈冊子六)の珊瑚尼の文中に「御むすめの御心になはぬとて泣いたまへる、人の心々なるは其面の如しと、常に教へたまはずや、世に魂あへる人やはある」とある。「子をなむひとりもたりける」とはそれをいつたのだ。

「五月雨の餘波高波を寄せ來ていと物憂かりければ、しばし外に移り住むとていきけり」とは、秋成が晩年居住した鴨川岸の羽倉信美の月待用の小亭で、五月雨の増水をいぶせく思うて享和三年(七十歳)六月の初に大阪に遊び、十時梅屋、釋齋收等と小澤蘆庵の大祥忌を修した時の事をいふのであらう。この留守中に娘が翁の祕藏する寶の貝を失つて心痛のあまり病臥したのを、翁の友人眞海老、鱸雄、女鮎、宇治丸等がさまざまに慰め賺したといふは、いかなる寶物であつたか知る由もないが、友人の名をすべて魚族に假托したのは無腸公子に縁をもたせたものであらうか。この邊から文章が俄然小説化して、上田家の祖先の物語は事實ながら、それに猿蟹合戦の昔語を取込み、最後に翁が酔のまぎれに足踏みはらゝかし、神樂歌を舞ひ、「稻春蟹のおのれだに嫁を得ず」と歌ふを、老友達に「かく老いに給へど猶嫁取りせまくとや、いと花々しくこそおはせ」と擲擻されて赤面したといふのは、五六年前に珊瑚尼を失うて孤影竦然たる翁の姿を見るやうである。(昭和十、四、十五)